

高齢者の海岸利用, 特に海水浴場に関する意識調査

井上 雅夫*・中川 良平**・吉村 隆生***・端谷 研治****

1. 緒 言

我が国における 65 歳以上の高齢者人口は, 1997 年 6 月に 14 歳以下の年少人口を上回り, 1998 年 2 月には 2,000 万人を超えるなど増加の一途をたどっている。この傾向は今後も続き, 2015 年には高齢者人口は 3,188 万人に達し, 高齢化率も 25%を超え, 国連の定義による超高齢社会が到来するものと予測されている(総務庁, 2000)。このような我が国における高齢化現象は, 世界でも未曾有なものであるとともに, その進行速度が急なことも大きな特徴である。

この研究の最終的な目標は, 我が国が活力ある高齢社会を目指すためには, 海岸がどのような役割を果たすべきかといった問題点を明らかにし, その方策を提案しようとするものである。従来, こうした高齢者の海岸利用に関しては, 海岸長期ビジョン研究会(1995)で検討され, 親しまれる海岸として, 高齢者や障害者などへの配慮が重要であることが指摘されている。しかし, 実際には, 1997 年から茨城県大洗町の大洗サンビーチでバリアフリービーチの試みがなされ, 障害者に好評であったことが報告(高橋, 1998)されている程度に過ぎない。したがって, 我が国における 21 世紀社会の海岸は, 障害の有無にかかわらず, 多くの高齢者にとって, より一層魅力あるものにしていかなければならない。

こうしたことから, まずこの論文では, 高齢者を対象とした海岸利用, 特に海水浴場に関する意識調査の結果を示し, それらに基づいて, 我が国における今後の海岸整備事業のあり方について二, 三の提案を行った。

2. 調査方法

この研究では大別して, 2 種類の意識調査を行った。一つは, 高齢者の海岸利用, 特に海水浴場に関するアンケート調査である。いま一つは, 現地の海水浴場における高齢利用者を対象としたヒアリング調査である。さらに, 前者のアンケート調査でも, 2 種類のものを行った。

まず最初に, 高齢者の海岸利用に関する一般的な意識調査を行った。これは, 大阪湾に直接面している大阪府大阪市と海岸に面していない大阪府吹田市の高齢者, また, 高齢者との比較を行うため青年層として 20 歳代の学生の 3 グループを対象として行った。表-1 には, この調査の対象者数を示した。アンケート項目の内容は, a) 属性 b) 一般的な余暇意識(余暇の実態と要望) c) 海岸利用(利用の実態, 海岸に対するイメージと関心の程度, 海岸の現況に対する満足度と要望)の 3 項目に大別される。しかし, 調査対象者ができるだけ答えやすいように, これらの 3 項目をさらに 17 項目に細分化し, すべて択一式で回答できるようにした。なお, 調査はいずれも 1998 年 10 月から 11 月までの間に実施した。

次に, 吹田市で現在も仕事に携わっている高齢者に対して, 海水浴場だけに限定したアンケート調査を行った。表-2 には, この調査の対象者数を示した。アンケート項目の内容は, a) 属性 b) 海水浴場の利用状況 c) 海水浴場に対する要望とした。なお, この調査は 1999 年 12 月に実施した。

いま一つの調査である現地の海水浴場でのヒアリング調査は, 我が国では, いずれもバリアフリーが進んでいる前述の大洗サンビーチ(調査日: 1999 年 8 月 4 日および 5 日), 兵庫県明石市大蔵海岸(調査日: 1999 年 8 月 16 日および 26 日)および神戸市須磨海岸(調査日: 1999 年

表-1 海岸利用に関する調査対象者数

年齢層	男性 (人)	女性 (人)	合計 (人)
高齢者 (60 歳以上)	68	25	93
(阪南市)	(42)	(12)	(54)
(吹田市)	(26)	(13)	(39)
青年 (19~29 歳)	124	14	138
合 計	192	39	231

表-2 海水浴場の利用に関する調査対象者数

年齢	男性 (人)	女性 (人)	合計 (人)
50 代	0	2	2
60 代	88	13	101
70 代	53	6	59
80 代	3	1	4
合 計	144	22	166

* 正会員 工博 関西大学教授 工学部土木工学科
** (株)大本組
*** 正会員 佐伯建設工業(株)
**** 正会員 工修 日本建設コンサルタント(株)

表-3 海水浴場におけるヒアリング調査対象者数

年齢	大洗サンビーチ			大蔵海岸			須磨海岸		
	男性 (人)	女性 (人)	合計 (人)	男性 (人)	女性 (人)	合計 (人)	男性 (人)	女性 (人)	合計 (人)
50代	10	3	13	1	3	4	0	0	0
60代	7	9	16	4	2	6	3	0	3
70歳以上	14	2	16	4	0	4	3	0	3
合計	31	14	45	9	5	14	6	0	6

8月26日)において実施した。表-3には、このヒアリング調査の対象者数を示した。ヒアリング項目の内容は、吹田市の高齢者に対して行ったアンケート調査の項目に加えて、それぞれの海水浴場に対する要望を高齢利用者から直接ヒアリングすることにした。なお、この調査では、調査対象者数が3海水浴場のものを合わせても65名で少ないため、結果は統計処理せずに、高齢者の海水浴場に対する意識や要望を自然環境とサービス施設に関するものと分類して整理することにした。

3. 調査結果とその考察

3.1 高齢者の海岸利用に関する意識

高齢者の海岸利用に関する調査に先立って、高齢者が余暇活動としてどのようなものを行っているかを質問した。その結果によると、ボランティア活動が67%で最も多く、次に、テレビ・ラジオの視聴で61%、趣味・娯楽の52%の順番であり、これには地域性の違いによる影響はあまり見られない。しかし、青年層との違いは明瞭である。すなわち、青年層の余暇の過ごし方は友人などとの団欒、趣味・娯楽、テレビ・ラジオの視聴の順番に多く、ボランティア活動は10%にも満たない。余暇利用に関し、高齢者が青年に比べて多いものは、ボランティア活動、宿泊旅行、テレビ・ラジオの視聴であり、その逆のものは休養、飲食・ショッピング、ドライブである。

このように、健康な高齢者は青年よりも活動的であると云えよう。また、今後、高齢者が望んでいる余暇活動としては、隣人との団欒が最も多く、次に健康や体力の維持・向上がはかれるもの、自然に触れ合えるもの、ボランティア活動の順番に多い。

図-1(a)および(b)には、「海岸」と云う言葉からイメージするものを、それぞれ年齢および高齢者の居住地ごとに示した。これによると、高齢者、青年のいずれについても年齢や居住地に関係なく、「海水浴」が最も多い。しかし、それ以後の順番は、海岸のある阪南市の高齢者では「磯浜」、「港」の順番であるが、吹田市の高齢者や青年ではこの順番が逆になっている。これは、大都市近郊の高齢者や青年の磯浜に対する認識が低いためである。

図-2には、過去2～3年間の海岸利用状況を示した。これによると、高齢者の78%が海岸を利用しており、

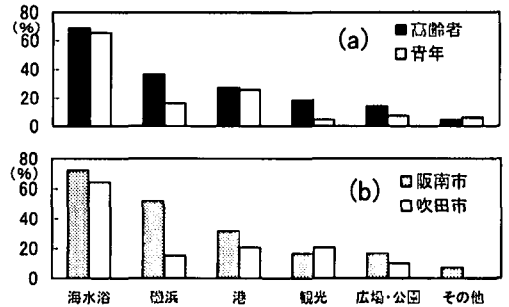


図-1 「海岸」からイメージするもの

青年の91%に対しても、あまり少なくはない。特に、阪南市の高齢者では93%にも達している。また、図-3(a)および(b)には、海岸の利用目的をそれぞれ年齢および高齢者の居住地ごとに示した。これによると、高齢者の利用目的は「自然の風景を楽しむ」が52%で最も多く、次いで「散策」の33%、「釣り」の24%である。なお、「自然の風景を楽しむ」に次いで多いのは、阪南市の高齢者

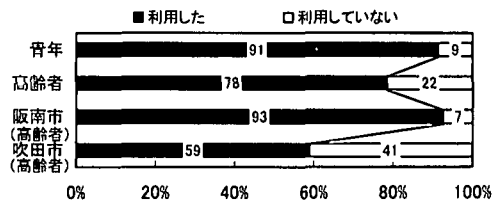


図-2 海岸の利用状況

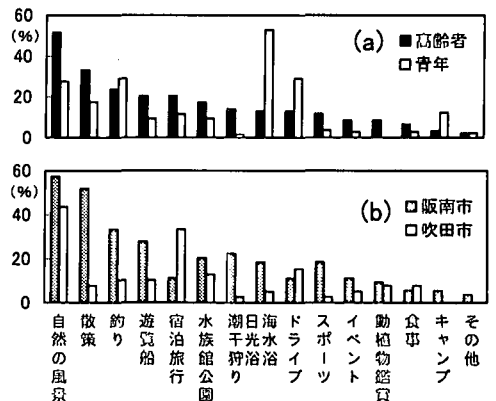


図-3 海岸の利用目的

では「散策」であるのに対し、吹田市のものは「宿泊旅行」であることが大きな特徴である。一方、青年で最も多いのは、「海水浴」や「日光浴」の53%であり、「釣り」と「ドライブ」がいずれも29%である。

このように、利用者の年齢や居住地によって海岸の利用目的が明確に違っていることは、その利用計画に際し十分に配慮すべきであろう。図-4には、海岸に対する関心度を示した。これによると、現在の海岸に関心を持っているのは、高齢者では68%にも達し、特に、この傾向は阪南市で著しい。一方、青年では32%しか関心を持っていない。また、海岸にまったく関心のないのは、高齢者、青年のいずれも10%以下である。

図-5には、海岸整備に対する満足度を示した。これによると、現在のものに対して満足しているのは、高齢者では16%にしか過ぎず、青年では31%が満足している。また、満足していないのは、高齢者では59%、青年では57%である。なお、図-4に示した海岸に対する関心度のごとの満足度を高齢者だけを対象として調べると、「興味あり」や「まあまあ興味あり」と答えた人の満足度はわずかに15%であるのに対し、高齢者の約60%は満足して

いない。

このように、高齢者の海岸に対する関心は高いにもかかわらず、現在の海岸整備や管理に対しては満足していないのが現状である。このことは、これまでの海岸整備が若者を対象として行われてきたことを示しており、今後の超高齢社会に向けては、高齢利用者を考慮した海岸整備を行っていくべきであろう。

図-6には、これからの海岸において、整備が必要と思われる施設を高齢者と青年ごとに示した。これによると、年齢にかかわらず、50%以上の要望があるものは、トイレと駐車場である。また、高齢者の要望が、青年のものに比べて10%以上も差のある施設は、遊歩道、ボードウォーク、スロープ、ベンチ、東屋、博物館・水族館、イベント広場、ゲートボール場やテニスコートであり、これらは高齢者の余暇利用や海岸の利用目的にほぼ対応したものである。一方、これらを高齢者の居住地ごとに見ると、吹田市のものに比べて阪南市のもので要望の多いものは、遊歩道、ボードウォーク、親水護岸、ベンチ、ゴミ箱、釣り場、ゲートボール場やテニスコートなど日常的な利用に供されるものである。これに対し、吹田市のものは、駐車場、レストラン、海の家、宿泊施設、博物館・水族館、キャンプ場などの要望が、阪南市のものに比べて多い。

このように、高齢者の居住地から海岸までの距離によって、海岸の利用目的が異なり、その結果として、整備を望む施設が違っていることは興味深い。

3.2 海水浴場に関する高齢利用者の意識

図-7には、「海岸」と言う言葉からイメージするものを示したが、表-2の海水浴場に関する調査対象者についても、図-1と同様な結果が得られた。すなわち、「海水浴」が最も多く、「磯浜」は「港」や「観光」よりも少ない。しかし、図-8に示した1999年における海水浴場の利用回数をみると、健康な高齢者の85%が海水浴場を1回も利用していない。この理由を明らかにするため、海水浴をしなくなった始期について調べた。図-9は、そ

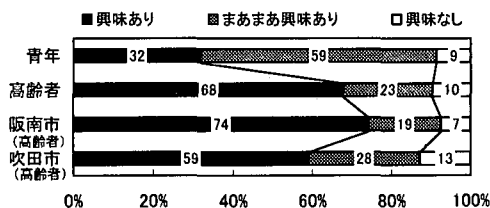


図-4 海岸に対する関心度

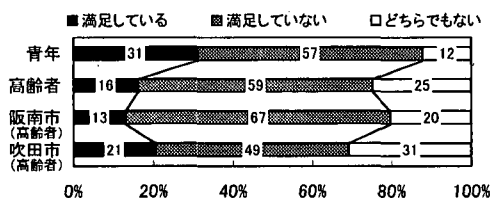


図-5 海岸整備に対する満足度

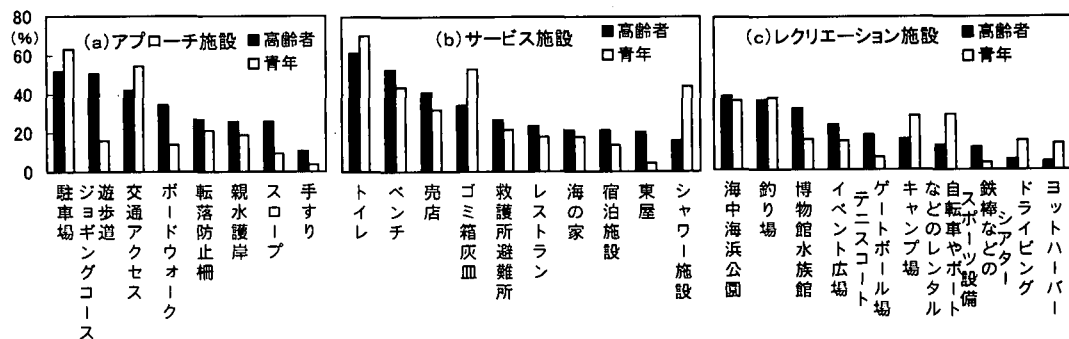


図-6 整備が望まれている施設

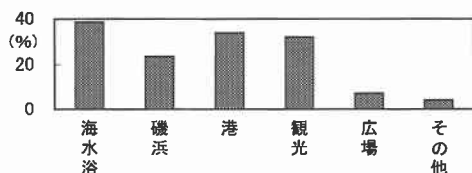


図-7 「海岸」からイメージするもの

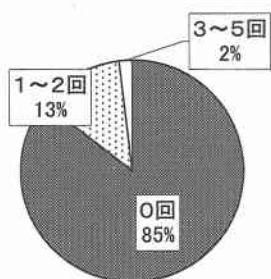


図-8 1999年における海水浴場の利用回数

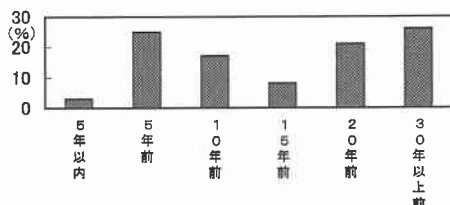


図-9 海水浴場を利用しなくなった時期

の結果を示したものであり、海水浴をしなくなったのは、約5年前と30年以上前に2つのピークがある。この調査対象者の平均年齢は68歳であるから、これを単純に考えると、海水浴場に行かなくなる年齢は約40歳と65歳と推定できよう。すなわち、こうした年齢になると、子供や孫たちが両親や祖父母とともに海水浴場に行かなくなるものと考えられる。なお、3.3で後述する現地の調査結果によると、海水浴場へ高齢者が1人のみで来る割合は9%、友人と来るものは13%であり、高齢者のほとんどは家族とともに海水浴場を利用している。

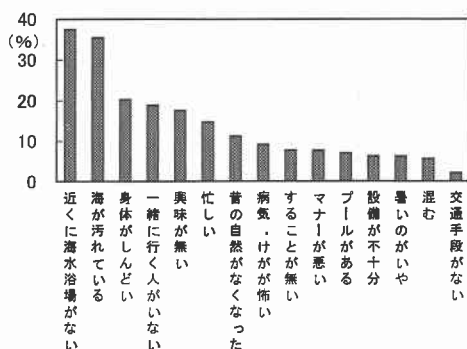


図-10 海水浴場を利用しない理由

図-10には、海水浴場へ行かない理由を示した。これによると、海水浴場が近くにない、海が汚れていると云った海水浴場そのものの条件に起因するものが多い。しかし、身体がしんどい、一緒に行く人がいない、興味が無い、多忙など私的な理由も挙げている。

3.3 現地の海水浴場における高齢利用者の意識

写真-1、2および3は、この調査で対象とした海水浴場の全景である。大洗サンビーチは、外洋に直接面して波高が大きく、遠浅で砂浜の幅が広く、水平線を見渡することができる。また、ボランティアによって、ランディー



写真-1 大洗サンビーチ



写真-2 大蔵海岸



写真-3 須磨海岸

表-4 海水浴場における高齢利用者の特性

近隣高齢者	利用目的	・友人との団聚 ・散歩
	利用者の構成	・単独、または友人
	利用頻度	・ほぼ毎日
遠隔高齢者	交通手段	・徒歩、自転車
	利用目的	・海水浴
	利用者の構成	・主として家族
	利用頻度	・年間1～2回
	交通手段	・自動車がほとんど

表-5 自然環境に対する高齢者の意識

大洗サンビーチ	・波高が大きすぎて、泳げない日がある。 ・砂浜が広すぎる。
大蔵海岸	・波高のもっと大きい波がほしい。 ・離岸堤によって景観が遮られる。 ・水上バイクが禁止されているので静かである。
須磨海岸	・波高のもっと大きい波がほしい。 ・水上バイクの音がうるさい。
共 通	・日差しを避ける松林や東屋を設置してほしい。 ・自然のままの砂浜を望む。 ・消波ブロックを撤去してほしい ・海水浴場に流れている音楽が不快である。

ズ（海水浴場の車椅子）の使用が常時可能であり、バリアフリーの海岸として有名である。大蔵海岸は、明石海峡大橋のすぐ西側にあり、その前面には離岸堤があつて波高は小さいが、砂浜にボードウォーク、護岸にスロープのあることが特徴である。須磨海岸も離岸堤があり、波高は小さい。しかし、砂浜背後の松林は広く、遊歩道もあつて、海の家が多いのが特徴である。

まず、表-4には海水浴場の高齢利用者の特性を一括表示した。これによると、居住地が近隣の利用者と遠隔地からのものとは、利用目的、利用者の構成（誰と利用するか）、利用頻度、利用交通手段に大きな違いがみられる。この結果からも、近隣の高齢者は日常的、遠隔地からの利用者は非日常的な利用をしていることが確認できる。

表-5には、各海水浴場の自然環境に対する高齢者の意識を示した。これによると、それぞれの海水浴場によって波高の大小、砂浜や離岸堤などの海岸構造物についての要望は当然異なっている。しかし、いずれの海水浴場においても、従来から指摘されてきたように、護岸や消波ブロックのない自然海浜を望むことのほかに、松林や東屋など海岸での強い日差しを避けるためのものが望まれている。事実、大洗海岸は砂浜面積が広いうえに、強風時には海浜砂が飛砂となるため、特に高齢利用者にとっては、かなり厳しい条件になっている。したがって、海水浴場の植栽・緑化はきわめて重要である。また、海岸の音環境についても、水上バイクの音や海水浴場でのスピーカーによる音楽に対しては、厳しい評価がなされ

表-6 サービス施設に対する高齢者の意識

大洗サンビーチ	・トイレ、シャワー、海の家が江線から遠い。 ・シャワー、更衣室の利用料金が割高である。 ・高齢者のランディーズに対する認識が低い。
大蔵海岸	・ボードウォークが好評である ・トイレ、シャワーの数が不足している。
須磨海岸	・利用者のマナーが悪い。 ・イベントが多く開催され楽しい。 ・ゴミ、花火のカスが多く散らかっている。
共 通	・海水浴場施設の利用料金が高い。 ・海を家のメニューが少なく、まずい。 ・一年中利用できる砂浜沿いの飲食店を設置してほしい。

ている。

表-6には、各海水浴場のサービス施設に対する高齢者の意識を示した。これによると、ランディーズやボードウォークは好評であるが、高齢者はあまり積極的に利用していない。また、トイレ、シャワーの海水浴場での適切な配置や休憩所などの利用料金の低廉化などは、いずれの海水浴場においても指摘されている。

4. 結 語

我が国は間もなく超高齢社会を迎える。この論文では、こうした時代における海岸と高齢者との関わりを良好なものにするため、高齢者の海岸利用、特に海水浴場に関する意識調査を行った。その結果、高齢者の多くは海岸に強い関心を抱いているが、現状の海岸整備に対しては、決して満足していないことを明らかにした。実際、著者らの現地調査においても、海浜やその背後には日陰がなく、高齢者が炎天下の砂浜で子供や孫たちの荷物番をしている姿を散見した。

このように、従来は海岸一夏一若者といった単純な関係が大方は肯定されてきたと云えよう。今後は、高齢者が海辺でゆったりと時間を過ごし、人生を振り返り、氣力を充実させる、すなわち、海岸一四季一老若男女、こうした関係を目指した海岸整備に努めるべきであろう。

最後に、本調査には多くの高齢者の方々に協力をしていただいた。特に、吹田市、阪南市、大洗町などの関係各位には大変お世話になった。ここに明記して深謝の意を表する。なお、島田広昭助手には大洗海岸の現地調査、和歌山県の小羽根則光氏には海岸利用に関するアンケート調査に助力してもらった。両氏にも謝意を表する。

参 考 文 献

- 海岸長期ビジョン研究会編（1995）：豊かな海辺の創造，第一法規出版，91 p.
- 総務庁編（2000）：数字で見る高齢社会 2000，大蔵省印刷局，232 p.
- 高橋正彦（1998）：大洗サンビーチにおけるバリアフリー・ビーチの試み，テクノオーシャン'98 論文集，pp. 81-84.